

記録から読み取る園庭の樹木に親しむ子どもの発見

濱田敏子^{1)*}, 小國かおり^{2)**}, 藤原美智子^{2)***}

- 1) 姫路日ノ本短期大学, 〒679-2151 兵庫県姫路市香寺町香呂 890
- 2) 幼保連携型認定こども園姫路日ノ本短期大学付属幼稚園, 〒679-2154 兵庫県姫路市香寺町相坂 467

Study on children enjoying trees in the kindergarten by records

Toshiko Hamada¹⁾, Kaori Oguni²⁾, Michiko Fujiwara²⁾

- 1) Himeji-Hinomoto College, 890 Koro, Koudera-Cho, Himeji 679-2151, Japan
- 2) Himeji-Hinomoto College Attached Accredited Child Garden, 467 Aisaka, Koudera-Cho, Himeji 679-2151, Japan

I. はじめに

平成 30 年度から執行された保育所保育指針、幼稚園教育要領、¹⁾ 幼保連携型認定こども園教育・保育要領において、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の 1 つに、「自然との関わり・生命尊重」がある。この姿は、「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探求心をもって考え、言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や、畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にする気持ちをもって関わるようになる。」というものである。^{3, 4)}

樹木は子ども達にとって身近な自然であり、保育の質（子どもが心身ともに満たされ豊かに生きることを支える環境や経験の質）を高める重要な保育環境である。

本研究では、保育内容としての「幼児期の戸外遊び・自然体験」に着目し、「安心して挑戦できる環境要件」の多面的理解を通して、自然体験の幼児教育への展開方法を検討することを目的とした事例検討を行う。

幼児教育を行う施設において、一番身近な園庭の樹木に子どもがどのように関わっているのか、触れること、登ること、また、季節によって葉が色づく変化に気づいたりすることなど、保育記録の中から子どもが樹木に触れたり、変化を感じる中で、どのような保育の効果が見られるのかを主題として取り上げる。

* 姫路日ノ本短期大学 教授

** 姫路日ノ本短期大学付属幼稚園 指導保育教諭

***姫路日ノ本短期大学付属幼稚園 園長

園庭の樹木と木登りについては、文部科学省の幼稚園施設整備指針²⁾にも、「安全性に留意しつつ、木登りなどの遊びができる樹種を選定することも有効である」とあり、いくつかの先行研究もある。^{5, 6)}

Ⅱ. 研究方法

兵庫県下にあるH幼稚園の保育実践記録を基に、子どもの樹木に対する接触行動と子どもの樹木と接した経験との関わりを考察した。

1) 研究対象児

兵庫県下にある幼保連携型認定こども園H幼稚園の5歳児を対象とした。5歳児クラスは60名（男児32名・女児28名）で構成される。

2) 記録

2018年度(4月から3月まで)の記録(日誌、個人観察記録、エピソード記録、写真を用いた保育実践記録など)を使用した。

3) 事例の選択

記録の中の子どもの言動から、樹木に触れる子どもの成長が見られた場面を抽出し、検討を行った。

Ⅲ. 研究結果

1. 「勇気の勲章」

a) 記録

5歳児になった当初、手を置く位置、登る時の力加減、降りる方法や、タイミングなどわがからず、擦り傷、青あざなどが出来る。跳び降りたら「足がジーンとする。」と言ったり、跳ばずにずるずると降りたりした時に「腕やお腹に、傷ができた。」「痛い。」と顔をしかめて保育教諭に見せに来る姿があった。(図1, 2)



図 1



図 2

b) 対応

保育教諭は「無理にしないでいいよ。」と伝えて見守っていたが、何度も繰り返し挑戦する子どもが多くいた。保育教諭は、話し合いの場を設け、木登りをしていた子どもの言葉や、木登りのポイントを伝え合う機会を多くもった。

c) 結果

途中で止めてしまった子も、また木登りに挑戦したり、友達と擦り傷の見せ合いをしたりして、上手いかず困っているのは自分だけでないことに気づく姿が見られた。経験を重ねるうち、傷を作らず身を守り、慎重に自分の力を判断したり、工夫したりして、他の遊びとの兼ね合いも考えながら、遊べるようになっていく。

※〔幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 10 項目の・健康な心と体(幼稚園生活の中で充実感や満足感を持って自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせながら取り組み、見通しをもって自ら健康で安全な生活を作り出していけるようになる。)]に該当する。

2. 「落ち着く樹木」

a) 記録

木登りの順番を待っていたM児。やっと順番が来て、好きな場所に登る。淡々と登っていくと途中でピタッと止まってしまう。

そこがお気に入りの木の幹のようで、しがみついている。保育教諭が「どうしたの?」と声をかけると、M児はとても良い表情を



図 3

して、「ここ好き。なまけもの～」と自分が感じたことを表現する。(図 3)

b) 対応

普段M児は、自分の気持ちを言葉としてあまり表現しない。M児の言葉に心の内面に触れることができたようで嬉しかった保育教諭は、木登りをしている子ども達のつぶやきや、会話をドキュメンテーションとして書き出していった。

c) 結果



図 4

「風がきもちいい。」「(幹に耳をあてて)何か音がする。」「あったかい。」「チクチクする。」

「桜の木、喜んでいみたい。」「この木に登ったら、幼稚園の全部が見える!」など、子どもの木に関する些細な気づきや発見を友だちや保育教諭に伝えるようになった。(図 4)

※〔・豊かな感性と表現 (みずみずしい感性を基に、生活の中で心動かす出来事に触れ、感じたことや思い巡らしたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりして、表現する喜びを味わい、意欲が高まるようになる。)・言葉による伝

え合い (言葉を通して先生や友達との心を通わせ、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付けるとともに、思い巡らしたことを言葉で表現することを通して、言葉による表現を楽しむようになる。)] の2項目に該当する。

3. 「愛着ある樹木」

a) 記録

木登りが遊びの1つとして習慣になってきた頃、木に親しみをもって、何度も挑戦するうち、コツをつかんでスムーズに登れるようになり、お気に入りの場所を見つけて、くつろぐ姿が見られるようになった。遊具とは違った味わいを楽しんで遊んでいた。秋の愛情弁当の日、大好きな桜の木の下で、お弁当を食べる。レジャーシートの側にたくさんの紅葉した葉が落ちており、穴があることに気づく。A児が「虫が食べたから、穴があるんや。」と言い、面白がって穴から空を覗いている。B児も同じように落ち葉を拾って、太陽に向け光を透かし、「見て～、めっちゃきれい!」と叫ぶと、どんどん友達に広がっていった。C児「お母さんに、お弁当作ってくれたから、おみやげにしよう!」D児「4枚持って帰ろう!きれいでしょ!」と言っていたので、保育教諭が「どうして、4枚?」と尋ねると、「4 人家族やから、お父さん、



図 5

お母さん、妹と、私!」と答え、拾った葉っぱを、弁当箱に入れて大切そうに持ち帰ろうとしていた。(図 5)

b) 対応

このような子どもの姿を保護者との話の中で伝えた。

c) 結果

次の日に保護者から「お弁当箱の中に、自分で拾った落ち葉を持ち帰っていました。」「光をかざすときれいだった事を教えてくださいました。」「楽しそうにお弁当を食べている様子を聞かせてくれました。」など、聞くことができた。

※〔・自然との関わり（前掲）・生命尊重 思考力の芽生え（前掲）・数量・図形、文字などへの関心・感覚（遊びや生活の中で、数量などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気づいたりする。）・社会生活との関わり（家族を大切にしようとする気持ちを持ちつつ、いろいろな人と関わりながら、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に一層の親しみを持つようになる。）〕の4項目に該当する。

4. 「自信の獲得」と「友達との関わりの変化」

1) 背景

T児は4歳児の頃から、5歳児が木登りをする姿に憧れていた。いつも近くで見て、保育教諭に抱き上げてほしいと言っていたが、自分の力で登ることの楽しさを伝えていた。また、T児は友達との関わりも苦手でトラブルになることが多い。保育教諭は、T児の行動や気持ちの変化を記録していった。

2) 記録

T児の順番は来ても、足がすくんでいて表情も陰しい。並ぶが諦める、または足をかけるが時間がかかり、後ろの友達に「早くして」と言われ、焦った末に怒ってトラ

ブルになる日が続いた。しかし諦めずに毎日挑戦している。

少しずつ登れるようになってきた。「T君、かわって。」「まだ？」と言う友だちの声に、「ちょっとまってー。」「わかったから！言わんといて！」と反論しながらも木の上に登ることはできないが、幹にしがみつき笑顔が出てきた。繰り返し遊ぶうちに余裕が出てきたT児である。

ある日、桜の木の側に倉庫があり、高く登れるようになったD児は、倉庫の屋根に近づきそうになる。登れる子はどんどん高く登り出し、1度順番が来て登ってしまうと、中々降りてこないため、下にいる子は待ち時間が長く、たくさんの子が登ると、木の上で交通渋滞がおこってしまっていた。保育教諭が枝と倉庫を指差しとアイコンタクトをとると、D児は「いっていいん？」

「やってみるよ。」と納得したように進み出した。下から見ている子ども達は、グッと息をのみながら静かに見守り、D児が渡りきると、倉庫の上の友達を自分のことのように喜び大歓声が上がる。そんなD児や友達の様子を見ていた負けず嫌いな性格のT児は、早速に挑戦を開始したが、「無理じゃないけど、今日はやめとく…。」と言い、木から降りてきた。「手と足がガタガタ震え、心臓もドキドキしている。」と呟いていた。

3) 結果

T児「できない。」と諦めきれない姿に、周りの友達も応援してくれるようになった。T児は挑戦を繰り返し、それを見ていた友達は「Tくん、がんばれ！」と応援する。慎重に少しずつ進み、倉庫の屋根の上に渡ると、少し経って「やったー登れたー！」と大きな声で喜んでた。この日はたまた

ま木登りする友だちは少なく、後ろには誰も並んでいない。足は震えるが、前ほどではないT児の覚悟が下で見えていて伝わってきた。一緒に登ろうとしているE児が「すごい、僕も！」と言い、T児に続き倉庫の上に渡り、三人で嬉しそうな表情で、倉庫の上から木を眺めていた。

4) 考察



図6

なかつたと気づいたり、登ったものの怖くて泣いてしまったりする子どもがいたりした。また、ショックで気を落とす子どもも多い。大抵初めは、「思ったより高かった。」「どうしよう。」「怖い。」「でも友だちはできている。」「なぜ自分はできないのだろう。」と考えて自分と向き合っていくと「できるようになりたい。」⇒「やりたい。」⇒「絶対やる。」と心が変化していった。この経験や心の変化から、友達の姿に憧れたり、認めたりすることを学んだ。その反面、出来ると思ったのにできなかった事への葛藤や、自分の力を知る大切な遊びだと、子ども達の取り組む姿を見て感じた。(図6)

※〔・道徳性・規範意識の芽生え（してよいことや悪いことがわかり、相手の立場に立って行動するようになり、自分の気持ちを調整し、友達との折り合いを付けながら、決まりを守る必要性が分かり、決まりを作ったり守ったりするようになる。）・健康な

どんどん挑戦する子どもが増えていった。初めて登る前は、擦り傷や、出来ると思っていたことが安易では

心と体（前掲）〕の2項目に該当する。

IV. 考察

「木登り」に関する保育教諭間の共通理解を通し、子ども達に安全で適切な援助を行うために、本園の保育教諭14名に対して、気づいたことや学んだことについて、自由記述によるアンケート調査を行った。

自由記述によるアンケート調査結果は以下の通りである。

- ・子ども達が手や体を擦り剥いても、諦めずに何度も挑戦をする姿を見て子ども達にはまだまだ色々な力が隠れていることを感じた。その子ども達の力を引き出せるような保育に励みたいと思った。
- ・高所で不安定な足場が苦手な子どもが多いのかと考えていたが、友だちの挑戦する姿に自分もやりたいと自ら感じ意識することで、主体的に行動するということが理解できた。
- ・木が園庭のほぼ真ん中にあり、幼稚園を見守っている存在なのだと感じた。
- ・季節によって変化する花や実、葉の色、また、木に住んでいる虫などの観察を通して、木のぬくもりやあたたかな優しい心が育っている。
- ・「高い所に登りたい」という本来自然にもっている子ども達の欲求をかなえている。危ないと決めつけず、約束事を話し合い、子ども達の登りたいという意欲や、挑戦しようとする気持ちを支えることが大切だと思った。
- ・木のザラザラ、ボコボコした感触を体で感じながら、枝の場所や太さ、細さを見て工夫しながら高いところを目指して登っていくワクワク、ドキドキ感を味わう

ことで、登れた時の達成感は大きい。

- ・自ら積極的にチャレンジすることで心と体を成長させることができる。
- ・足を滑らせ、擦り傷を作ることもあるが、その体験を通して、自分の体を守る事を学ぶことができた。
- ・子ども達の可能性は未知数で「危ないから。」とか「無理だろう。」とか決めつけてしまう自分の思いを改めて見つめ直すきっかけとなった。
- ・目標を達成するまでの子ども自身の心の葛藤や努力、それを乗り越えるために自分の力を発揮し、達成した時の目の輝きや、誇らしげな顔……。そばで見ることが出来て子ども達の未知なる可能性を実感した。
- ・木登りを通して、足や手の運び方、木の上での満足感、乗り越えようと木登りを通して多くのことを学び体感したとを感じる。
- ・友達の姿に憧れたり、認めたりすることを学ぶ。その反面、出来なかったのにできなかった事への葛藤や、自分の力を知る大切な遊びだと、子ども達の取り組みを見て学んだ。
- ・安全面から考慮すると、「してはいけない」と制限してしまう行為になってしまいがちなこの時代。遊びから学ぶ子ども達の表情や、意気込みを近くで感じ、大人のあり方、サポートの仕方を改めて考えた。
- ・子ども達が達成したときの笑顔は最高に光っていた。

以上の自由記述によるアンケート結果から、次のことがいえる。

- 1) 子どもがもつ潜在的力を信じ、子どもの挑戦する気持ちを大事にすること。

2) 子どもがもつ主体性は友だちの影響を受け育まれるところも大きい。

3) 子どもは樹木からぬくもりを感じ、優しい心を育てている。

4) 子どもは、友だちへの思いやりをもち、自分の心を育てている。

V. まとめ

園庭にある樹木は、子ども達にとって日頃から見慣れた風景であり、愛着を感じ、そして情緒の安定が図れる場所としての役割があるものとして再認識し実感した。

また、木登りは繰り返し挑戦することで自分の出来ること、出来ないことを知るきっかけとなった。

日常の園生活において、積極的に樹木に触れようとする機会は少ない。そこで、「安心して挑戦できる環境要件」を設定し、樹木への接触行動を促すプログラムが必要になる。園庭の樹木に関心をもち、樹木を好きになるためのプログラムである。

樹木への接触行動は、想像以上の未知数の自然に触れることであり、自然を感じることである。このような様々な自然体験を通して「生きる力」の基礎となる心の育ちの援助ができる環境教育の内容と方法が問われている。

そして、樹木は遊具ではなく、関わり方によっては安全なものではないと言えるため、怪我に繋がらないための人員配置や、子どもの能力を判断する力が保育教諭には必要であり、また、クモや毛虫、ヨコヅナサシガメ等の害虫対策も重要なことの一つである。

さらには、プログラムを開始する前や途中の段階においても、自分自身を大切する

ことや、友達との関係を大切にするにはどのようにすれば良いのかななどを考え約束事が作られた。

樹木に親しむ子ども達の姿を見て、子ど

- ・必ず大人がいる時にする。
- ・登るのは3人まで。
- ・自分の力で登る。
- ・もしもの時、飛んで着地するスペースを確保しておく。
- ・友達をせかすと、危険なので気をつける。

ものの心に寄り添った保育を心掛けていく大切さの再確認とともに、その実践や記録を基に保育教諭同士の子どもに関する相互理解や保育観の共通理解を図ることが重要であると考えられた。

加えて、幼稚園や保育園において木登りや落葉・落枝を用いて遊ぶなどの樹木に接した経験が小学校での樹木への接触行動を誘発する要因にはなるといわれる。⁵⁾

幼小接続の大切さを考えると、幼稚園や保育園、そして、こども園においてどのように樹木との関わりをもたせていくことが効果的なのか、園庭の整備、そして、具体的な学習プログラムの作成等を行い、その効果をより深く探っていく必要があると考える。

参考文献

- 1) 文部科学省 (2018 年 2 月) 幼稚園教育要領解説, フレーベル館
- 2) 文部科学省 (2009 年 3 月) 幼稚園施設整備指針
- 3) 松本信吾 (2018) 身近な自然を活かした保育実践とカリキュラム 中央法規出版
- 4) 国土緑化推進機構 (2018) 森と自然を活かした保育・幼児教育ガイドブック 風鳴社
- 5) 遠藤知里 (2018) 幼児教育における子どもと森;安心と挑戦をもたらし環境としての樹木 第 129 回日本森林学会大会抄録 pp. 41.
- 6) 長友人幸, 藤村周平 (2015) 樹木に対する児童の接触行動と幼児期の接触経験 日本理科教育学会全国大会要項 (65), pp. 417.